

混住化農村への流入過程の一考察

—倉敷市上東における既婚女性の事例—

野 邊 政 雄

1. 本稿の目的

他の地方都市の場合と同様に、岡山市の近郊農村では、混住化が進展している。つまり、農村集落へ来住者が流入したり、あるいは農民が在村のままで転職をすることによって、住民構成が多様化している。その上、交通手段（例えば、自動車）や通信手段（例えば、電話）の発達のおかげで、住民の交際範囲が拡大した。こうして、同質的で閉鎖的であった集落は、異質的で開放的な地域となってきた。

筆者は、平成3年7月にそうした混住化が進行している一集落である倉敷市上東（大字）において、60歳未満の既婚女性を対象に調査を実施した。本稿の目的は、そのデータの分析によって、そうした女性がどのような地域移動を経てその集落に定住するようになったかを明らかにすることである。

2. 調査地の概要

上東は倉敷市の東北部にあり、岡山市と境を接している。だから、上東は、岡山市の近郊農村であると共に、倉敷市の近郊農村でもある。上東をはじめとする9つの村が庄学区（小学校区）を構成している。庄学区は、もともと都窪郡庄村という行政村であったが、昭和46年に倉敷市に編入された。上東には、倉敷市立の庄幼稚園、庄小学校、庄中学校があり、庄学区内の児童や生徒が通っている。また、倉敷市役所庄支所が上東に置かれている。

その地域の産業に目を向けると、上東は、昔から米や蔦草（いぐさ）を中心とした農業地帯であった。韓国や中国などの安価な蔦草が輸入されるようになると共に、重労働である蔦草の栽培作業に人を雇用できにくくなったため、昭和50年頃にその栽培は衰退してしまった。現在、大部分の農家は、機械化による兼業の米作りを行っている。

上東の人口動態は、次のようである。上東の大部分は市街化区域であるが、上東以外の庄学区のかなりの部分は市街化調整区域である。住宅開発のしやすさから、上東では団地の造成が昭和45年頃から始まった。これ以降、人口増加が現在まで続いている。数値で示せば、昭和47年には世帯数は255世帯、人口は975人にすぎなかった。昭和50年には世帯数は521世帯、人口は1,852人となり、昭和60年には世帯数881世帯、人口2,997人となった。このように、人口が徐々にかつ間断なく増加している（倉敷市 1972-1985）。そして、平成元年9月現在、上東の世帯数は958世帯、人口は3,235人である。

農家の割合は、次のように減少した。上東は岡山市や倉敷市の中心部に至近であるので、農家の兼業化が以前より進行していた。昭和50年には第2種兼業農家は81%を占めており、昭和60年には90%となった。ところが、団地の開発が進展しても、農家数は現在まであまり減少していない。昭和50年の総農家数は120世帯であり、昭和60年におけるこの値は106世帯であるというように、10年間に14世帯の減少にすぎなかった。これは、農業機械の普及のおかげで、週末に農業を効率的に行い、平日に勤めに出ることができるからである。

南北に走る県道大内田・高松線が上東を東西に2分している。上東の東部に地元住民の集落がある。その集落に点在する空き地を購入し、来住者が上東の東部に居住している。そこでは、新旧住民の家屋が入り交じっている。小規模な団地が1つそこに建設されている。これと対照的に、上東の西部は、元来、耕地であった。小規模な団地は、そこに順次造成されていった。そして、多くの来住者は、上東の西部に居住している。上東にはアパートもあるが、大部分の住宅は一戸建てである。

3. 調査方法

上東の選挙人名簿から、60歳未満の既婚女性を1世帯より1名抜き出した。選挙人名簿には既婚・未婚の記載がないので、同居している男性の年齢からそれを推定した。2名以上の該当する女性が1世帯にいる場合には、無作為にそのうちの1名を選んだ。上東の周辺にあり、他の集落に地理的に隣接する家屋が若干あったが、ここに居住する女性は調査対象者から除外した。以上の方法で612名を列挙した調査対象者台帳を作成した。そして、台帳に記載された人を悉皆調査（すべての人を調査）した。

調査は面接法によって実施した。平成3年7月1日に調査依頼の葉書を台帳に記載された人に出した。7月6日から7月20日までの間に、学生調査員が該当する女性を訪問し、面接によって調査を行った。有効票数は341であり、無効票数は271であった。なお、この調査の詳細については、筆者の別稿（野邊 1992）を参照願いたい。

4. 調査項目

回答者である既婚女性が、過去の3時点においてどこに居住していたかを調査した。それらの居住地は、(1)出生地、(2)10代を主にすごした場所、(3)前住地である。本稿では、これら3つの居住地を手がかりにして、彼らの上東への流入過程を追跡したい。それらの居住地は、(1)庄学区（上東がある小学校区）、(2)岡山市・倉敷市、(3)岡山市・倉敷市以外の岡山県（以後、「県内」と呼ぶ）、(4)岡山県以外（以後、「県外」と呼ぶ）に4分する。

回答者は、地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性とに2分し、それぞれの人々がどのような地域移動を経て、上東に住むようになったかを分析する。調査では、地元層を「混住化する以前からある家で出生し、現在もそこに居住する人、あるいはそうした家と親族関係にある人」と定義した。そこで、既婚女性の場合、地元層とは次の4つのいずれかである。(1)上東が混住化する以前（調査では、昭和40年とした）からあった家で生まれ、結婚後も上東の実家で居住している人、(2)上東が混住化する以前からあった家で生まれ、結婚後に上東で新居を構えた人、(3)上東が混住化する以前からあった家出身の男性と結婚して、その男性の実家へ転入した人、あるいは(4)上東が混住化する以前からあった家出身の男性と結婚して、上東で新居を構えた人、のいずれかである。地元層をこのように定義したので、来住者層とは、混住化する以前から上東にあった家と親族関係を持たない人々ということになる。回答者のうち、地元層の既婚女性は114人であり、来住者層のそれは226人であった。

5. 調査結果の提示

(1) 地元層の既婚女性の流入過程

まず、地元層の既婚女性の出生地を表1でみると、岡山市・倉敷市と「県内」で出生した人がそれぞれ30%以上と多く、庄学区で出生した人々も21%と比較的多い。逆に、「県外」で生まれた人々が14%と少ない。このように、彼らの大部分は、岡山県内で出生した。では、「県内」で出生した人々が岡山県のどの市町村で生まれたかを追究したい。図1の市

表1 過去の3時点におけるそれぞれの地域の居住者数（地元層の既婚女性）

	出 生 地 (%)	10代を主にすごした 場所 (%)	前 住 地 (%)
庄学区	24(21.1)	28(24.6)	32(28.1)
岡山市・倉敷市	38(33.3)	36(31.6)	54(47.4)
「県内」	36(31.6)	36(31.6)	19(16.7)
「県外」	16(14.0)	14(12.3)	9(7.9)
合 計	114(100.0)	114(100.0)	114(100.0)

(注) それぞれの地域を居住地とする人数。「県外」には、外国も含まれる。



図1 過去の3時点における岡山県内の市町村別居住者数（地元層の既婚女性）

(注) 括弧内の左の数字はそこでの出生者数、中央の数字はそこで10代を主にすごした人数、右の数字はそこを前住地とする人数である。

町村の中に3つの数字が記されているが、左の数字がそれぞれの市町村での出生者数である。大まかな分布をみるために、岡山市と倉敷市を除いた岡山県内の市町村を、(1)北西部、(2)北東部、(3)南西部、(4)南東部の4つに分けた⁽¹⁾。そして、「県内」出生者36人をこの4つの地域に纏めると、北西部は4人、北東部は7人、南西部は17人、南東部は8人となる。これから、「県内」で生まれた人々の出生地は岡山県内に一様に分布しているのではなく、岡山県の南西部にやや集中していることが判る。それでは、「県外」で出生した人々はどの都道府県で生まれたかをみると(表2)、そうした人々の出生地は岡山県の近県が多い。

次に、地元層の既婚女性が10代を主にすごした場所を検討する。表1によれば、10代をすごした場所は出生地とその分布でほぼ同じである。つまり、庄学区、岡山市・倉敷市、及び「県内」で10代をすごした人々が多いのに対し、「県外」で10代をすごした人々は少ない。では、「県内」で10代をすごした人々

に注目して、彼らがどの市町村で10代をすごしたかを明らかにしたい。図1の市町村の中にある3つの数字のうち、中央の数字がそれぞれの市町村で10代をすごした人数である。出生地の分析と同様に、岡山県内の市町村を4つに区分して、10代をすごした場所の大雑把な分布をみると、北西部は4人、北東部は6人、南西部は18人、南東部は8人となる。つまり、「県内」で10代をすごした人々のそうした地域は、出生地と同様に、岡山県の南西部に偏っていた。次いで、「県外」で10代を主にすごした人々は、どの都道府県で10代をすごしたかをみたい。表2によれば、「県外」出生者の分布と同様に、「県外」で10代をすごした人々の多くは、岡山県の近県で10代をすごしていた。

10代を主にすごした場所を人口規模という視点からも探究したい。回答者が10代をすごした時代の人口規模でその場所を分類すると、表3のようになる。ただし、10代をすごした場所が庄学区である場合には、庄学区として示すと共に、次のようにそれを分類した。前述のように、庄学区はもともと都窪郡庄村という行政村であったが、昭和46年に倉敷市に編入された。だから、それ以前に庄学区で10代を主におくった場合には、庄学区を村として分類し、それ以降にそこで10代を主におくった場合には、庄学区は倉敷市の人口規模(10万人以上20万人未満の市)で分類した。この人口規模による分類によると、地元層の既婚女性のおよそ3分の2が町村か人口10万人未満の小市で10代をすごしていた。そして、人口が100万人以上の市で10代をすごした人々は、わずか2%にすぎなかった。

それから、地元層の既婚女性の前住地を吟味する。表1によると、前住地は、10代をすごした場所とその分布でかなり相違している。このことから、10代をすごした以降に、多

表2 過去の3時点における県別居住者数(地元層の既婚女性)

	出生地(%)	10代を主にすごした場所(%)	前住地(%)
新 潟 県	1(0.9)		
静 岡 県			1(0.9)
愛 知 県	1(0.9)	1(0.9)	1(0.9)
滋 賀 県			1(0.9)
京 都 府		1(0.9)	3(2.6)
大 阪 府	1(0.9)	1(0.9)	1(0.9)
兵 庫 県	4(3.5)	3(2.6)	1(0.9)
和歌山県	1(0.9)	1(0.9)	
鳥 取 県	1(0.9)	1(0.9)	
島 根 県		1(0.9)	
広 島 県	3(2.6)	3(2.6)	
愛 媛 県	1(0.9)	1(0.9)	
高 知 県			1(0.9)
熊 本 県	1(0.9)		
鹿児島県	1(0.9)	1(0.9)	
外 国	1(0.9)		
庄 学 区	24(21.1)	28(24.6)	32(28.1)
岡 山 県	74(64.9)	72(63.2)	73(64.0)
合 計	114(100.0)	114(100.0)	114(100.0)

(注) それぞれの府県を居住地とする人数。岡山県は、表1の岡山市・倉敷市と「県内」の人数の合計である。

くの人々が地域移動をしたと推論できる。前住地と10代をすごした場所を比較すると、「県内」が前住地である人々の割合が低くなり、逆に岡山市・倉敷市が前住地の人々の割合が高くなっている。そして、岡山市・倉敷市が前住地である人々は、47%にまで増加している。そこで、「県内」で10代をすごした人々の多くが、その後、岡山市・倉敷市に移動したと考えられる。そして、そうした女性が、その後、地元層の男性との結婚などで、上東に流入したと推論できる。では、前住地が「県内」である人々の場合、具体的にどの市町村がそうであったかを明らかにしたい。図1の市町村の中にある3つの数字

のうち、右の数字は、それぞれの市町村が前住地である人数である。前住地の大きな分布をみると、北西部は1人、北東部は2人、南西部は11人、南東部は5人である。図1の各市町村の中にある3つの数字を比較すると、庄学区から地理的に遠い市町村では、10代をすごした人々がいても、そこが前住地である人数が減少している傾向を読み取ることができよう。つまり、庄学区から遠い「県内」の市町村で10代をすごした人々は、岡山市や倉敷市へ一旦出てから、上東へ流入しているようである。それでは、「県外」が前住地の人々はどの都道府県が前住地であったかを表2でみると、岡山県から地理的に遠い県がほとんどである。これから、岡山県の近県で10代をすごした人々は、その後、岡山市や倉敷市に移動したと推論できる。

最後に、地元層の既婚女性の流入過程を検討する。これまでは、出生地、10代をすごした場所、前住地それぞれがどのように分布しているかを究明した。しかし、これら3つの時点における居住地がどのように関連しているかを追究したわけではなかった。そこで、庄学区、岡山市・倉敷市、「県内」、「県外」それぞれで出生した人々が、それぞれどのような流入過程を経て上東に居住するようになったかを究明する。それぞれの地域で出生した人々が辿った主要な流入過程は、次のようであった。

(1)庄学区が出生地である人々の場合、すべての人々が10代を庄学区ですごしていた。そして、その大部分は、前住地も庄学区であった。すなわち、庄学区で10代をすごし、前住地もそこである人々がほとんどである。地元層の既婚女性の19%が、このように一貫して庄学区に居住していた。

(2)岡山市・倉敷市で出生した人々では、10代をそこですごし、前住地もそこであるというパターンが、岡山市・倉敷市で出生した人々の主要な流入過程を形成している。23%の人々がこの流入過程を経て、上東に居住するに至った。

(3)「県内」が出生地である人々の場合、主要な流入過程が2つある。1つは、10代を「県内」ですごし、前住地が岡山市・倉敷市であるパターンである。この流入過程を経由して上東に居住するようになったのは11%の人々である。もう1つは、10代をすごした場所と前住地がいずれも「県内」であるパターンである。13%の人々が、この流入過程を経て上東に居住するようになった。

表3 それぞれの人口規模の場所で10代を主にすごした人数（地元層の既婚女性）

人 口 規 模	人数(%)
村	4(3.5)
町	23(20.2)
5万人未満の市	17(14.9)
5万人以上10万人未満の市	4(3.5)
10万人以上20万人未満の市	8(7.0)
20万人以上50万人未満の市	24(21.1)
50万人以上100万人未満の市	4(3.5)
100万人以上の市	2(1.8)
不明	0(0)
庄学区（村）	23(20.2)
庄学区（10万人以上20万人未満の市）	5(4.3)
合計	114(100.0)

(注) 10代を主にすごした場所を人口規模別に分類し、それぞれに該当する人数を示している。

表4 過去の3時点におけるそれぞれの地域での居住者数（来住者層の既婚女性）

	出 生 地 (%)	10代を主にすごした 場所 (%)	前 住 地 (%)
庄学区	15(6.6)	16(7.1)	29(12.8)
岡山市・倉敷市	60(26.5)	72(31.9)	134(59.3)
「県内」	65(28.8)	66(29.2)	21(9.3)
「県外」	86(38.1)	72(31.9)	42(18.6)
合 計	226(100.0)	226(100.0)	226(100.0)

(注) それぞれの地域を居住地とする人数。「県外」には、外国も含まれる。



図2 過去の3時点における岡山県内の市町村別居住者数（来住者層の既婚女性）

(注) 括弧内の左の数字はそこでの出生者数，中央の数字はそこで10代を主にすごした人数，右の数字はそこを前住地とする人数である。

(4)「県外」が出生地である人々の場合、その主流は、10代をすごした場所が「県外」で、前住地が岡山市・倉敷市というパターンである。9%の人々がこの流入過程を経て、上東に居住するようになった。

(2) 来住者層の既婚女性の流入過程

まず、来住者層の既婚女性の出生地を表4でみると、庄学区で生まれた人は7%と少なく、代わりに、「県外」で生まれた人が38%と多かった。そして、岡山市・倉敷市と「県内」で生まれた人々は、それぞれ30%近くいた。彼らの多くが「県外」で出生していたことは、地元層の既婚女性の出生地が岡山県内に集中していたことと対照的である。では、「県内」で出生した人が岡山県のどの市町村で生まれたかを探りたい。図2の市町村の中に3つの数字が記されているが、左の数字がそれぞれの市町村での出生者数を示している。岡山県内の市町村を4分して、大まかな分布をみると、北西部は7人、北東部は8人、南西部は32人、南東部は18人となる。これから、「県内」で生まれた人々の出生地は岡山県内に一様に分布しているのではなく、岡山県の南西部と南東部、とりわけ南西部に集中していることが判る。そして、南西部の中で、出生者が10人である総社市が際立っている。次いで、「県外」で出生した人々はどの都道府県で生まれたかを表5でみると、岡山県の近県が多い。ただし、彼らの出生地は、地元層の既婚女性の場合よりも、日本全国に拡散している。

次に、10代を主にすごした場所を検討する(表4)。10代をすごした場所は出生地とその分布においてかなり近い。主な相違は、「県外」で10代をすごした人々の割合が低くなり、逆に、岡山市・倉敷市で10代をすごした人々

の割合がいくらか高くなっていることである。これから、「県外」で出生した若干の人々が、岡山市・倉敷市に地域移動をして、そこで10代をすごしたと推論できる。では、「県内」で10代をすごした人々が、岡山県のどの市町村で10代をすごしたかをみたい。図2の市町村の中にある3つの数字のうち、中央の数字がそれぞれの市町村で10代をすごした人数で

表5 過去の3時点における県別居住者数(来住者層の既婚女性)

	出生地(%)	10代を主にすごした場所(%)	前住地(%)
北海道	1(0.4)		
岩手県	1(0.4)	1(0.4)	
茨城県			2(0.9)
栃木県		1(0.4)	
埼玉県	1(0.4)	1(0.4)	
千葉県			3(1.3)
東京都	3(1.3)	4(1.8)	
神奈川県	1(0.4)	1(0.4)	
富山県	1(0.4)	1(0.4)	
福井県	1(0.4)	1(0.4)	
山梨県	1(0.4)	1(0.4)	
静岡県	1(0.4)		
愛知県	1(0.4)	1(0.4)	3(1.3)
滋賀県	1(0.4)	1(0.4)	
京都府			1(0.4)
大阪府	5(2.2)	4(1.8)	13(5.8)
兵庫県	11(4.9)	11(4.9)	3(1.3)
鳥取県	2(0.9)	2(0.9)	1(0.4)
島根県	6(2.7)	4(1.8)	1(0.4)
広島県	15(6.6)	12(5.3)	6(2.7)
山口県	5(2.2)	6(2.7)	
徳島県	4(1.8)	2(0.9)	
香川県	4(1.8)	4(1.8)	4(1.8)
愛媛県	3(1.3)	3(1.3)	1(0.4)
高知県	3(1.3)	3(1.3)	
福岡県	6(2.7)	4(1.8)	
佐賀県	1(0.4)	1(0.4)	
長崎県	1(0.4)		
熊本県			1(0.4)
大分県	1(0.4)	1(0.4)	1(0.4)
宮崎県	3(1.3)	2(0.9)	
鹿児島県	2(0.9)		
外国	1(0.4)		2(0.9)
庄学区	15(6.6)	16(7.1)	29(12.8)
岡山県	125(55.3)	138(61.1)	155(68.6)
合計	226(100.0)	226(100.0)	226(100.0)

(注) それぞれの都道府県を居住地とする人数。岡山県は、表4の岡山市・倉敷市と「県内」の人数の合計である。

ある。その分布の概要をみると、北西部は7人、北東部は7人、南西部は33人、南東部は19人となる。つまり、「県内」で10代をすごした人の多くは、出生地とほぼ同じように、岡山県の南西部と南東部、特に南西部で10代をすごしていた。その中で、10代をすごした人が10人もいた総社市が他の市町村を凌駕している。続いて、「県外」で10代をすごした人々は何の都道府県でそうしたかをみると（表5）、岡山県の近県が多いけれど、地元層の既婚女性の場合よりも、日本全国に拡散している。

10代をすごした場所を人口規模という視点からも解明する。回答者が10代をすごした時代の人口規模でその場所を分類すると、表6のようになる。来住者層の既婚女性の約半数が、町村が人口10万人未満の小市で10代をすごしていた。そして、人口が100万人以上の市で10代をすごした人々は、わずか4%にすぎない。

それから、来住者層の既婚女性の前住地を吟味する（表4）。前住地は10代をすごした場所とその分布でかなり相違する。これから、10代をすごした以降に、かなり多くの人々が地域移動をしていたと考えられる。そして、前住地と10代をすごした場所を比較すると、地元層の既婚女性

表6 それぞれの人口規模の場所で10代を主にすごした人数（来住者層の既婚女性）

人 口 規 模	人数(%)
村	2(0.9)
町	56(24.8)
5万人未満の市	27(11.9)
5万人以上10万人未満の市	17(7.5)
10万人以上20万人未満の市	23(10.2)
20万人以上50万人未満の市	64(28.3)
50万人以上100万人未満の市	12(5.3)
100万人以上の市	8(3.5)
不明	1(0.4)
庄学区（村）	13(5.8)
庄学区（10万人以上20万人未満の市）	3(1.3)
合計	226(100.0)

（注）10代を主にすごした場所を人口規模別に分類し、それぞれに該当する人数を示している。

の場合と同じように、「県内」が前住地である人々の割合が低くなり、逆に岡山市・倉敷市が前住地の人々の割合が高くなっている。この変化が地元層の既婚女性の場合よりも大きいことは、特筆に値する。つまり、「県内」が前住地である人々は9%にまで減少しているのに対し、岡山市・倉敷市が前住地である人々は59%にまで増加している。また、これほど大きくはないけれど、「県外」が前住地である人々も19%まで少なくなっている。これらのことから、「県内」と「県外」で10代をすごしたかなり多くの人々が、その後、岡山市・倉敷市に移動したと推論できる。さて、「県内」が前住地である人々の場合、岡山県内のどの市町村が前住地であるかを明らかにしたい。図2の市町村の中に3つの数字が記されているが、右の数字がそれぞれの市町村が前住地である人数である。「県内」が前住地である人々の、前住地の分布の概要をみると、北西部は2人、北東部は1人、南西部は13人、南東部は5人である。このように、「県内」から上東へ直接流入した人々のほとんどは、南西部や南東部からであった。では、「県外」が前住地である人々の場合、どの都道府県が前住地であるかを表5でみると、岡山県の近県が多い。ただし、彼らの前住地は、地元層の既婚女性の場合よりも、日本全国に拡散している。さて、同表によると、それぞれの都道府県を前住地とする人数は、10代をそこですごした人数よりも減少するのが通例であるが、大阪府はこの例外である。そこで10代をそこですごした人は4人であったけれど、そこを前住地として上東へ直接流入した人は13人もいた。これは、岡山県が大阪府と経済的に強固な結び付きがあることを示している⁽²⁾。

最後に、庄学区、岡山市・倉敷市、「県内」、「県外」で出生した人々が、それぞれどのような流入過程を経て上東に居住するようになったかを検討する。

(1)庄学区が出生地である人々の場合、そのほとんどが10代を庄学区ですごしている。そ

うした人々について、2つの流入過程がある。1つは、10代をすごした場所と前住地が庄学区であるパターンであり、もう1つは、10代を庄学区ですごし、前住地が岡山市・倉敷市というパターンである。ただし、来住者層の既婚女性で庄学区で生まれた人々は来住者層の既婚女性のうち7%と少ないので、これらの流入過程を取った人々の割合は極めて低い。

(2)岡山市・倉敷市で出生した人々では、そのほとんどが10代を岡山市・倉敷市ですごしている。そして、前住地も岡山市・倉敷市であるというのが主要な流入過程である。来住者層の既婚女性の20%がこの流入過程を経て、上東に居住するに至った。

(3)「県内」が出生地である人々の場合、その大部分はやはり「県内」で10代をすごしている。そうした人々の主要な流入過程は、前住地が岡山市・倉敷市であるパターンである。この流入過程を取って、上東に居住するようになったのは、16%の人々であった。事例数ではそれよりも遙かに少数であるが、10代をすごした場所と前住地がいずれも「県内」であるパターンもある。この流入過程を経たのは、8%の人々である。

(4)「県外」が出生地である人々の場合、主要な流入過程が2つある。1つは、10代をすごした場所が「県外」で、前住地が岡山市・倉敷市であるパターンである。この流入過程を経由して、上東に居住するようになったのは、13%の人々であった。もう1つは、10代をすごした場所と前住地がいずれも「県外」であるパターンである。この過程を取ったのは12%の人々であった。事例数ではこれらよりも少ないが、10代をすごした場所と前住地が岡山市・倉敷市である流入過程と10代を「県外」ですごし前住地が庄学区という流入過程がある。5%の人々がそれぞれの流入過程を経由して、上東に居住するようになった。

5. 結果の検討と要約

以上の結果が、本稿の課題に示唆する点を考察する。

第1に、地元層と来住者層の既婚女性に共通してみられる趨勢を指摘したい。その趨勢とは、出生地、10代を主にすごした場所、前住地は大部分が岡山県内であるということである。ただし、前住地を10代をすごした場所とその分布でかなり変化しており、10代をすごして以降、人々が上東の近くに移動する傾向があった。また、10代を主にすごした場所を人口規模という視点から見ると、過半数の回答者のそうした場所は、町村か10万人未満の小市であることも忘れてはならない。

第2に、出生地、10代を主にすごした場所、前住地について、地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性の間の違いを指摘したい。出生地と10代を主にすごした場所について、両者の間にみられる大きな相違は、地元層の既婚女性の方が、庄学区で生まれ、10代をすごした割合が高く、逆に、来住者層の既婚女性の方が、「県外」で生まれ、10代をすごした割合が高いことである。ただ、岡山市・倉敷市と「県内」で出生したり、10代をすごした人々の割合は、地元層の既婚女性も来住者層の既婚女性もほぼ同じである。特に、10代をすごした場所では両者の差は、僅かである。要約すれば、地元層の既婚女性は上東の周辺域で生まれ、10代をすごしていたのに対し、来住者層の既婚女性のそうした場所は遠域である傾向がみられる。それから、地元層の既婚女性も来住者層の既婚女性もほぼ4分の3は、庄学区あるいは岡山市・倉敷市を前住地としていた。ただし、両者を比較すると、地元層の既婚女性の方が、庄学区と「県内」が前住地である人々の割合は高い。これに対し、岡山市・倉敷市と「県外」が前住地である人々の割合は、来住者層の既婚女性の方が高い。

第3に、地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性が上東へ流入した過程を比較・検討したい。石原の類型(石原 1985)を少し改変して、都市への流入過程について、「一貫居住型」、「都市転出型」、「都市経由型」、及び「直接流入型」の4つの類型を設定し、それぞ

れを次のように定義する。(1)「一貫居住型」は、過去の3時点いずれにおいても庄学区に居住しているタイプである。(2)「都市転出型」は、岡山市や倉敷市で出生し、10代を主にそこで過ごし、前住地もそこである人々が、その郊外にある上東に移転するタイプである。(3)「都市経由型」は、「県内」や「県外」で出生し、10代を主にそこで過ごした人々が、岡山市や倉敷市といった中規模な地方都市を前住地として、上東に住み着くに至るタイプである。(4)「直接流入型」は、「県内」や「県外」で出生し、10代を主にそこで過ごした人々が、岡山市や倉敷市を前住地としないで、上東に直接に住み着くに至るタイプである。

前述した、上東への主要な流入過程を、この4つの類型に整理して、地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性が取った流入過程の割合を対比的に示すと、表7ようになる。地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性いずれかが、5%以上を取った流入過程のみを掲げ、割合の低い流入過程はその表から省略した。この表より、次のことがいえる。

表7 主要な流入過程を経由した割合

流入タイプ	流 入 過 程	地 元 層 の 既 婚 女 性	来住者層の 既 婚 女 性
一貫居住型	庄 学 区→庄 学 区→庄 学 区	22(19.3)	7(3.1)
都市転出型	岡山市・倉敷市→岡山市・倉敷市→岡山市・倉敷市	26(22.8)	45(19.9)
都市経由型	「県内」→「県内」→岡山市・倉敷市	13(11.4)	36(15.9)
	「県外」→「県外」→岡山市・倉敷市	10(8.8)	29(12.8)
直接流入型	「県内」→「県内」→「県内」	15(13.2)	17(7.5)
	「県外」→「県外」→「県外」	2(1.8)	28(12.4)
そ の 他	「県外」→岡山市・倉敷市→岡山市・倉敷市	2(1.8)	12(5.3)
	「県外」→「県外」→庄 学 区	1(0.9)	11(4.9)

(注) 5%以上の地元層の既婚女性ないし来住者層の既婚女性が取った主要な流入過程のみを示している。従って、合計は100%にならない。

(1)地元層の既婚女性では、庄学区「一貫居住型」を取った人々の割合が高い。これは、結婚後、夫が妻方の定位家族と同居し、妻が上東にある自分の実家にずっと留まった人々が、地元層の既婚女性にはいるからである。

(2)地元層の既婚女性でも来住者層の既婚女性でも、「都市転出型」で上東に流入した人々の割合は20%前後であり、両者の間にあまり差はない。

(3)来住者層の既婚女性は、地元層の既婚女性よりも「都市経由型」で上東に流入した人々の割合が高い。

(4)「県内」から「直接流入型」で上東へ定住した人々の割合は、地元層の既婚女性の方が高い。これに対し、「県外」から「直接流入型」で上東へ定住した人々の割合は、来住者層の既婚女性の方が高い。

第4に、本稿での分析を踏まえ、岡山市といった中規模な地方都市の近郊住民の流入経路を、大都市近郊住民のそれと比較・検討したい。1955年から1970年頃にかけての高度経済成長期に、全国各地から東京圏・大阪圏・名古屋圏へ人々が流入した。そこで、大都市圏の住民の多くは、地方出身者であると報告されている(倉沢 1968; 町村 1984)。これに対し、本稿の分析結果によれば、上東では岡山県ないしその近県の、町村や10万人未満の小市出身者が比較的多かった。つまり、岡山市や倉敷市の後背地から人々が上東へ集まってきた。ところで、中藤(1985, p.80)は、混住化が進む地方都市の近郊農村では、流入者の多くはその都市かその周辺出身者であるのに対し、大都市の近郊農村では、流入者の多くは大都市でない地域の出身であり、日本全国から集まっていると論じている。本

稿の知見は、中藤の論点を裏付けている。

更に一步踏み込んで、回答者の定位家族の家業を検討する。これまで上東で農業を営んできた地元層の家には、農家出身の女性が嫁する傾向があると思われるから、地元層の既婚女性は来住者層の既婚女性よりも農家出身者の割合がかなり高いと予想できる。調査結果によれば(表8)、青少年期において家業が農業であった地元層の既婚女性(専業農家と兼業農家の合計)は65%であり、来住者層の既婚女性のその割合は41%である。地元層の既婚女性の多くが農家出身者であることは予想通りであったが、来住者層の既婚女性に農家出身者が占める割合は予想よりも高い。これは、地元層の既婚女性のみならず地元層の既婚女性も岡山県ないしその近県の、町村や小市出身者が多かったからと考えられる。そこで、地元層の既婚女性と来住者層の既婚女性は、青少年期の家庭環境でかなり類似していたといえる。

表8 10代の頃の実家の家業

	地元層の既婚女性 (%)	来住者層の既婚女性 (%)	合 計 (%)
専 業 農 家	44(38.6)	38(16.8)	82(24.1)
兼 業 農 家	30(26.3)	54(23.9)	84(24.7)
農 家 で な い	39(34.2)	134(59.3)	173(50.9)
不 明	1(0.9)	0	1(0.3)
合 計	114(100.0)	226(100.0)	340(100.0)

最後に、混住化が進展している岡山市の近郊農村(上東)の既婚女性を対象とするデータの分析から得られて知見は、次の3点に要約できよう。

(1)地元層の既婚女性でも来住者層の既婚女性でも、出生地、10代を主にすごした場所、前住地は、大部分が岡山県内である。ただし、出生地と10代をすごした場所は、地元層の既婚女性では上東の周辺域であるのに対し、来住者の既婚女性では遠域である傾向がみられた。そして、両者の約4分の3は、庄学区(上東のある小学校区)ないし岡山市・倉敷市を前住地としていた。前住地は10代をすごした場所とその分布でかなり変化しており、10代をすごして以降、人々が上東の近くに移動する傾向があった。

(2)上東への主要な流入過程は、次のようであった。地元層の既婚女性では、庄学区で一貫して居住している人々が多かった。また、地元層の既婚女性では、岡山市・倉敷市で生育し、そこから上東へ流入したり、「県内」で生育し、岡山市・倉敷市を経由して上東へ流入したり、「県内」や「県外」で生育し、直接上東へ流入するというパターンの人々も多かった。これに対し、来住者層の既婚女性では、岡山市・倉敷市で生育し、そこから上東へ流入したり、「県内」や「県外」で生育し、岡山市・倉敷市を経由して上東へ流入したり、「県外」で生育し、直接上東へ流入するというパターンの人々が多かった。

(3)10代を主にすごした場所を人口規模という視点からみると、上東では岡山県ないしその近県の、町村や10万人未満の小市出身者が比較的多かった。そこで、地元層の既婚女性のみならず来住者層の既婚女性に、農家出身者が占める割合が高かった。

注

- (1) それぞれの地域に含まれる市町村は、次の通りである。北東部には、上斎原村、奥津町、鏡野町、加茂町、阿波村、東栗倉村、西栗倉村、大原町、勝田町、奈義町、勝北町、勝央町、津山市、久米町、中央町、柵原町、美作町、作東町、英田町、久米南町が含ま

れる。次に、北西部には、川上町、八束村、中和村、富村、湯原町、美甘村、新庄村、大佐町、勝山町、久世町、旭町、落合町、北房町、有漢町、神郷町、新見市、哲西町、哲多町が入る。南西部には、賀陽町、高梁市、成羽町、備中町、川上町、芳井町、美星町、総社市、山手村、清音村、真備町、矢掛町、井原市、笠岡市、里庄町、寄島町、鴨方町、金光町、船穂町が含まれる。最後に、南東部には、加茂川町、建部町、吉井町、佐伯町、和気町、吉永町、日生町、備前市、熊山町、赤坂町、御津町、山陽町、瀬戸町、長船町、邑久町、牛窓町、灘崎町、玉野市、早島町が含まれる。この区分は、『岡山県万能地図』（山陽新聞社 1988）に基づいている。

- (2) 出生地、10代を主にすごした場所、及び前住地としての岡山市と倉敷市を、子細に検討・比較してみたい（図1と図2を参照）。地元層の既婚女性では、岡山市で10代をすごした人々は22人であり、同市を前住地として上東に流入した人々は36人であるのに対し、倉敷市で10代をすごした人々は14人であり、同市を前住地として上東に流入した人々は18人である。このように、地元層の既婚女性では、岡山市を前住地とする人々がそこで10代をすごした人々に比べて多く、同市を経由して多くの人々が上東に流入した。さて、来住者層の既婚女性では、岡山市で10代をすごした人々は38人であり、同市を前住地として上東に流入した人々は60人であるのに対し、倉敷市で10代をすごした人々は34人であり、同市を前住地として上東に流入した人々は74人である。地元層の既婚女性の場合と対照的に、来住者層の既婚女性では、倉敷市を前住地とする人々がそこで10代をすごした人々に比べて多く、同市を経由して多くの人々が上東に流入した。このように、地元層の既婚女性が岡山市を、来住者の既婚女性が倉敷市を前住地としている事例が多かったが、その理由は不明である。

引用文献

- 石原多賀子、「来住者層の地域社会への認識と評価」（二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編、『混住化社会とコミュニティ』、御茶の水書房、所収）。
- 倉沢 進、1968、「都市流入と社会的移動」（倉沢 進、『日本の都市社会』、福村出版、所収）。
- 倉敷市、1972-1985、『倉敷市統計書』、倉敷市。
- 町村敬志、1984、「全体社会と都市」（鈴木 広・倉沢 進編、『都市社会学』、アカデミア出版会、所収）。
- 中藤康俊、1985、「高度経済成長と混住化社会」（二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編、『混住化社会とコミュニティ』、御茶の水書房、所収）。
- 野邊政雄、1992、「『混住化農村調査』第1次報告書(1)」、『岡山大学教育学部研究集録』、第89号、岡山大学教育学部。
- 山陽新聞社、1988、『新版 岡山県万能地図』、山陽新聞社。

本稿は、日本証券財団研究調査助成金による研究成果の一部である。

（平成5年11月12日受理）